

身体と感情の関係についての現象学的一考察 —発達障害をよりよく理解するために—

A phenomenological study on a relationship between body and emotion : For better understanding of developmental disorder

大 塚 類
Rui OTSUKA

1. はじめに——発達障害における身体感覚と感情

1-1 身体感覚と感情の捉えがたさ

発達障害の当事者の語りからは、彼らが、みずからの身体感覚や感情の意味を捉えることに困難を抱えていることが浮き彫りとなる。

例えば、自閉症者であるテンブル・グランディンの自伝を分析している臨床心理士の田中によれば、グランディンには、「自分が圧倒されそうなほどの刺激にあふれた【過剰な感覚世界】」、「映像による思考世界」、自分の周囲の他者関係や他者の気持ちのみえにくさ、といった生得的特徴がみてとれる、とされる（田中2009）。

アスペルガー症候群と診断されている綾屋は、みずからの体験を分析し、「自閉」を次のように定義づけている。すなわち、「身体内外からの情報を絞り込み、意味や行動にまとめあげるのがゆっくりな状態」（綾屋・熊谷2008,76頁）、と定義づけている。綾屋の場合、身体内外からの細かくて大量の刺激や感覚を等価に感受してしまうため、乱立する感覚情報が飽和しやすい状況にある。したがって、綾屋は、これらの刺激や感覚から意味（例えば、空腹）をまとめあげ、行動（例えば、空腹を充たすために昼食を摂る）に移すことにかなりの時間がかかる。さらには、一度できた意味や行動のまとめあげパターンも容易にほどこけやすいため、綾屋は、日常的にフリーズ⁽¹⁾やパニックに陥ってしまうという。

神田橋ほか（2010）における、精神科医、カウンセラー、当事者の鼎談では、自分の感情を捉えにくい発達障害当事者の在りようについて、以下のような例が紹介されている。すなわち、アスペルガー症候群のなかには、嬉しさなどの感情を感じない人がいること、また、発汗・顔の紅潮・心拍数の上昇などの身体状況の変化と結びつけることで、「怒り」の感覚を主観的に理解しようとする人がいること、さらには、温度計のなかにグレーディングで自分の身体状況を入れていき、身体の状態と表情と感情の表現を対比させることで自分の感情を理解できるようになる教材について、

紹介されている⁽²⁾。

1-2 関係障害としての発達障害

以上でみてきたように、発達障害の当事者は、自分自身の身体感覚や感情の意味を捉えることにさえ、意識的な努力や訓練を必要とすることが多い。さらには、他者関係という観点から発達障害について語られる際には、しばしば、他者の気持ちや場の雰囲気をつめることの難しさについて触れられる。例えば、上述した綾屋は、「なんだか楽しそうな様子はわかるので、できればそれに乗って私も楽しさを味わい、一緒に笑いたいと思うのだが、『なぜみんなはそこで笑えるのか』を把握することができない」と述べている(綾屋・熊谷2010)。他者理解におけるこうした困難さは、自分自身の身体感覚や感情の意味を捉えることの困難さと地続きのものである、といえよう。すなわち、発達障害の当事者にあつては、自分自身の身体感覚や感情の捉えがたさが、他者の身体感覚や感情の捉えがたと密接に繋がっている、といえよう。

発達障害研究のなかには、こうした他者との関係に焦点を当てたものが多数存在する。

例えば、精神科医の杉山によれば、発達障害の当事者は、「親子の信頼ときずなに始まり、他者の気持ちを読むこと、さらに人との付き合い方や社会のルール習得」といった「社会性の発達」に障害を蒙っている、とされる(杉山2012a)。児童精神科医である滝川は、発達障害を、「人間の振る舞いの意味や約束を捉えわせる『認識』の発達と、他者との社会的な関わりを営む『関係の発達』との相互作用からなる「精神発達」の遅れや個人差、と定義づけている(滝川2012)。関係発達論の提唱者である鯨岡と、児童精神科医の小林は、発達障害を含めて障害のある子どもは、時間経過のなかで、周囲との関係のありようが子どもと周囲の人間に負の影響を広げていく「関係障害」を抱え込んでいる、と指摘している(鯨岡2012; 小林2010)。また、「被虐待児全体が1つの発達障害症候群と考えることが可能である」(杉山2012b)、という杉山の指摘からも、発達障害が、当事者の他者関係や他者経験の在りよう密接に関わっていることが窺える。

筆者はこれまで、児童養護施設や公立小学校でのフィールドワークを通して、多くの被虐待児、発達障害児、あるいは診断は受けていないもののグレーゾーンといえる子どもたちと関わってきた。こうした関わりのなかで、子どもたちが、自分自身の感情や衝動をもてあまして苦しんでいる様子や、他者の気持ちがわからなかったり、逆に、他者に自分の気持ちをわかてもらえなかったりして他者と衝突してしまう様子を、何度となくみてきた。こうした子どもの教育や養育に携わるケアワーカーや教師の苦悩と、当事者である子どもが抱えざるをえないさまざまな苦しみをふまえると、発達障害は関係障害であるという指摘は、的を射ているといえる。こうした関係障害を少しでも緩和するためには、まず、発達障害の当事者が語っている自分自身の感情の捉えがたさや、他者理解の難しさがいかなるものであるのかを、具体的に考えていく必要がある。

人間の経験の構造について思索している現象学の知見に基づけば、発達障害の当事者の語りからも示唆されているように、身体感覚と感情は密接に関係している。そこで本稿では、まず、一人の人間における身体感覚と感情についての現象学的知見を概観する。そのうえで、そうした身体感覚

に基づく他者理解の在りようについて概観する。こうした概観をとおして、自分自身の感覚や感情が捉えがたく、さらには、他者理解が難しい、とされる発達障害の在りようを捉えなおすことを目指す。こうした捉えなおしは、発達障害の当事者が生きている世界を少しでも明確に描き出すことである。と同時に、そのように生きられた世界に即した仕方での、当事者に対する教育や支援を探る方途にもなるはずである。

2. 自分自身の身体感覚と感情

2-1 雰囲気として感知される感情

ヘルマン・シュミッツは、感情や気分と雰囲気との関係について思索している。

・主観性のニュアンス

シュミッツによれば、自分自身の体験には、三人称によっては記述しえない「個々人の体験のニュアンス」(Schmitz1974,S.325)が、すなわち、「主観性のニュアンス」(Schmitz1981,S.92)が備わっている、とされる。

こうした主観性のニュアンスは、「情感的に打ち当てられるという仕方で襲われていること (affektives Betroffensein)」である (Schmitz1974,S.326)。このように情感的に襲われている状態のおかげで、「何かが私に感動を与え、〔他ならぬ〕私の事柄となる」のである (ebd.)⁽³⁾。つまり、何らかの体験に付随する気分や感情の際立ちや変化において、他ならぬ自分自身が何かを体験したということが、私自身に実感される。と同時に、当の体験が、私自身の事柄として出会われてくる。しかも、こうした時の私は、自分から切り離された対象として感情を知覚しているのではない。そうではなく、「感情に捉えられている状態」(ebd.)をみずから生きている。つまり、身体感覚と感情状態は、同時的かつ同質的に生起している。

前節で概観したように、発達障害の当事者は、外的な刺激と、身体内部の感覚と感情状態とを区別して一つの意味にまとめあげることが難しかったり、ある感情に捉えられている状態を身をもって実感することが難しかったりするものであった。主観性のニュアンスという観点からすると、彼らのこうした在りようは、自分自身の体験であるという感覚の希薄さ⁽⁴⁾、と捉えることができる。自分自身の体験であるという感覚が希薄である限り、その体験が積み重なり、習得されることは難しくなってしまう。だからこそ、綾屋が述べていたように、一度できた意味や行動のまとまりが容易にほどけてしまうのであろう。また、滝川が述べていた、発達障害の当事者における「認識」の発達と「関係」の発達の困難さも、体験の積み重なりと習得の難しさをその理由としている、と考えられることになる。

・雰囲気としての感情

主観性のニュアンスとしての感情について述べる一方で、シュミッツは、次のようにも述べてい

る。すなわち、「通常は個々人の私的な事柄としてみなされている感情」は、空間的な広がり具备了「雰囲気でもある」(a.a.O., S.329)、と。

例えば、経験的にも容易に理解できるように、私たちは、「人々が緊張に満ち溢れて集まっている」場に居合わせた際、「ここにはただならぬ気配〔dicke Luft=何かを孕んだ気配〕が漂っている」(a.a.O., S.327)と感じる。こうしたただならぬ気配は、雷雨の直前に、急に空が暗くなり、冷たい風が吹き下ろしてきて、空気がピリピリした電気と重い湿度を孕んでいる時と近い状態にある。このように、気候としての雰囲気と感情としての雰囲気は、ほとんど区別できない。したがって、シュミッツと共に、「天候ないしは気候的・視覚感覚的(klima-optisch)雰囲気は、…多くの場合ある感情でさえある。あるいは少なくとも、その境目がはっきりしないのだが、感情に近い状態にある」(a.a.O., S.328)、といえることになる。気候としての雰囲気は、例えば、心がほどけるような水辺の清冽な涼しさや、皮膚に張り付いて全身で息苦しさを感ずるほどの蒸し暑さ、という在りようで、私自身の状態としての感情や身体感覚と一体となっている。すると、気候であると同時に感情と身体感覚でもある雰囲気は、私自身の現在の状況のみならず、周囲の環境世界の在りようをおのずと開示していることになる。事実、シュミッツも、空間性を備えた気候は、「直接的であり、しかるべき位置を与えられておらず、反省によって自分とは異なるものとされていない印象」(ebd.)に留まっている、と述べている。

このように気候としての雰囲気と、自分自身の感情と身体感覚が区別できないほどに近いものであるならば、自分の感情や身体の状態が世界の現われを変化させると同時に、周囲世界における雰囲気の変化が、自分の気分の状態に反映されることになるはずである。他方、上述したように、発達障害の当事者は、自分自身の感情に身をもって襲われることに困難さを抱えているのであった。自分自身の感情と身体感覚が、周囲世界の雰囲気と同時的かつ未分化であることをふまえれば、彼らが、自分自身の感情や身体感覚だけではなく、周囲の雰囲気や他者の感情や身体感覚を捉えることにも困難さを抱えざるをえないことを、さらに深く理解できるようになる。

2-2 自己触発と自己被触発存在

シュミッツと共に考察することで、雰囲気としての感情や身体感覚と気候的雰囲気とは、かなり似通った仕方で感知されており、両者は明確に区分できない、ということが明らかになった。しかし、シュミッツの思索に依拠するだけでは、主観性のニュアンスといった言葉で表現されている生の営みの内実や、いかにして感情状態が雰囲気として空間性を備えているかを、十分に考察できない。他方、感情が空間性を備えている根拠について考察する際に手がかりとなるのが、自己触発という観点である。

・自己触発と妥当性の雰囲気

現象学の創始者であるエトムント・フッサールは、何らかの対象と関わっている時の私たちの在りかたについて、以下のように記述している。すなわち、「自我として私は触発されて (affiziert)

おり、〔何らかの対象に〕自らを差し向けながら、〔その対象に〕従事しつつ、あれやこれやの能動性において、私自身と、すなわちしかじかに能動的であった私自身と、ある仕方で常に関わり合っている」(Husserl, Ms.AV5[1933],8b)、と⁽⁵⁾。私たちは、何らかの振る舞いに及ぶことによって常に自己触発されながら、「非主題的で先対象的に己れ自身を触知(sich befinden)している」(中田1997,58頁)。このように己自身を触知しているからこそ、私たちは、自分の過去の行為を主題的に捉えなおすという意味で反省したり、体験を積み重ねてさまざまな事柄を習得できるのである。

自己触発という存在様式に依拠しつつ、その内実をさらに展開させるなかで、現象学的教育学者である中田は、上述のような存在様式を、「自己被触発存在」(中田1993,129頁)と名づけている。以下では、判断作用という能動的な自己遂行を例としながら、自己被触発存在の内実を明らかにしたい。

例えば、 $a=b$ 、 $b=c$ 、ならば $c=a$ 、という判断作用が連続的に遂行される時には、すでになされた判断は、引き続きなされる、より高次の判断の妥当性を保証している。というのも、判断作用という能動的な自己遂行を実現している私が、絶えず自己触発されていることに基づき、「各判断作用は、それに先行する判断作用と一体となって形成される自己被触発存在において遂行されるからである」(同,175頁)。このことは、フッサールの言葉を用いて、以下のように言い換えられる。すなわち、「そのつど能動的に意識されたものと、それと相関的に、能動的に意識してしまっていること」とを、「沈黙し隠されていても、共に機能している妥当性の雰囲気」が、すなわち、生き生きした地平が、遊動しつつ取り囲んでいる」のであるが、「この常に流れ続けている地平性のおかげで、自然的な世界〔内での〕生において端的に遂行されている各々の妥当性は、いつもすでに、様々な妥当性を前提としている」(Husserl1954,S.152)、と。したがって、自己遂行に伴う自己被触発存在は、判断作用を連続的に遂行している私の現在の状態であると同時に、これらの判断の妥当性を保証し続ける妥当性の雰囲気ともなっている(中田1997,433頁参照)。

・＜当たり前＞という感覚の希薄さ

以上でフッサールと中田と共に考察することで、私たちの現在の状態である自己被触発存在、すなわち、私たちの感情状態や身体感覚が、自分自身の行為の連続性や、存在そのものの連続性のなかで私たちが生きることを支えている、といえることになる。と同時に、私たちが＜当たり前＞という感触をもって、日常生活を支障なく過ごしていることを支えているのも、無意識かつ非主題的に前提とされている妥当性の雰囲気なのである。すると、みずからの感情状態や身体感覚をうまくまとめあげられない、発達障害の当事者は、自分自身の行為や存在そのものの連続性の感覚が希薄である、と考えられることになる。だからこそ、繰り返しになるが、経験の積み重ねや習得を前提としている「発達」に障害を蒙っている、とみなされることになるのであろう⁽⁶⁾。と同時に、彼らは、＜当たり前＞という感触をもって日常生活を営めていないことになる。彼らがフリーズしてしまったり、パニック状態に陥ったり、自分に自信がもてなかったりすることは、この＜当たり前＞の感覚の希薄さ、すなわち、＜当たり前＞さに充分に支えられていないことの現われ、と言えるのではないだろうか⁽⁷⁾。

2-3 先構成されている世界

ここまでみてきたように、発達障害の当事者にとっては、空間性や身体性を伴う感情と外部世界からの刺激とを区別できないこと、また、自己の身体の内外的感覚や刺激が大量かつ等価であることが、日常生活における困難さを招いている。当事者によって生きられている世界を捉えるためには、まず、いわゆる〈通常〉の在りかたにおける、空間性や身体性を伴った感情と、世界を知覚することとの関係についてみていく必要がある。

そこで、以下では、世界内の諸物体が、意識によって志向的に構成される以前に身体によってどのようにして予め構成されているのかを解明している、ルートヴィヒ・ラントグレーベの記述を、身をもって私に「生きられた空間」(中田1993,133頁)に関する中田の記述と関連させながらみていきたい。

・感性野としての背景が先構成されること

私たちが物体を知覚する際、私たちに対して常に直接現前しているのは、現われの連続的で多様な変化の一側面としての原印象(Urimpression)だけである。例えば、私がペットボトルを知覚する際、私が直接見ているのは、私に対して正面にあるペットボトルの一面だけである。にもかかわらず、私は、ペットボトルを、厚みや諸側面を備えた物体として知覚している。というのは、私の意識において、すでに過ぎ去ってしまった原印象を現在において保持し続ける過去把持と、これから来たるべき原印象を志向している未来予持とによって把捉されているものが、原印象と共に総合統一化されているからである。このことは、ラントグレーベの言葉を用いれば、知覚作用においては、「流れつつある現在と過去把持と未来予持との総合という仕方です」、「原印象的な所与」が「根源的に総合される」(Landgrebe1974,S.475,69頁)、と言い換えることができる⁽⁸⁾。このように、知覚対象が主題化される際の契機となっている原印象的な所与は、「感性〔的な知覚〕能力に配列されているそのつどのキネステーズ(Kinästhesie)の領野に関連づけられている」(aa.O.,S.476,69頁)、とラントグレーベは述べる⁽⁹⁾。というのも、私たちが物体を知覚できるのは、「私かな」という自我の作用が発揮される以前にすでに遂行されている、キネステーズの能力のおかげだからである。しかし、「知覚作用はまったく無のところから何らかの対象を構成することはできない」(中田1993,137頁)。

例えば、私が自分の部屋で、手にしているマグカップを眺めている時、周囲に目を向ければ、机の上に置かれたパーソナル・コンピューターや、本棚に並んでいる本や、壁にかかっている時計など、自分の部屋の様々な物体を見ることができる。これら諸物体は、方向定位の零地点としての私の身体を中心に、私に対して、ある方向と奥行きとしての距離とを備えて存在している。と同時に、私の視野に入っている諸物体は、隣接している物体と「相互に境界づけられた多種多様な色彩」(同,134頁)を備えて、視覚的に現われてもいる。しかし、それらの物の一つに目を向けると、その物だけが、或る厚みと奥行きとを備えた実在物として際立って現われてくることになる。他方、その物の周囲にある諸物体は、それが視野の中心部から離れたところであればあるほど、それに備

わっているはずの厚みや、形や、私に対する奥行きとしての距離が曖昧になっていく。と同時に、それら諸物体間の境界や、厚みや、奥行きとしての距離の差異も曖昧となる。したがってこの時、これら周囲の諸物体は、「他の色と境を接することによって或る形をなして伸び広がってはいても、或る物体の色としてではなく、単に視野を満たしている色彩として感覚されているだけでしか」（同所）なく、それゆえ主題的な知覚対象の背景となっている。主題的な知覚対象を取り囲んでいる地平としてのこうした背景が、上述した仕方で、「視覚的感覚質（＝視像ファントム）と呼ばれるような視像として現われてくるだけ」（同所）の時には、私は、背景となっている諸物体を実在物として知覚しているわけではない。

以上のことから、主題的な知覚対象としてのある物体が、「私から一定の距離をもって、しかも…奥行きとしての距離をもって現われてくる」と同時に、「それを囲んでいる地平としての視界の中から際立っている時に」初めて、その物体が「或る位置に実在するものとして私に体験される」（同所）、といえることになる。知覚作用に関する以上の考察から、中田は、「空間というものが〔予め〕存在しているのではなく」、「或る物体を厚みと奥行きとをもった物体として主題化する知覚作用が、主題化された物体を背景から際立たせている視野を空間化している」（同、136頁）ことを明らかにしている。と同時に、こうした知覚作用が「空間化作用」（同上）でもあることを導き出している。

では、私の知覚作用によってこのように空間化されている視野は、私の身体によっていかなる仕方

で構成されているのであろうか。

私の視野の周辺部にある諸物体は、「それを主題化するためには身体や眼球筋のいかなる動きを必要とするのか、ということさえ予め私の身体に非主題的に知られているような仕方、主題化されている物体の背景をなしている」（同、135頁）、と中田はいう。例えば、手にしているマグカップを直前まで見つめていたとしても、私は、「あたかも私の目がそこに引き寄せられるような仕方、キネステーゼ」（同、138頁）を働かせ、壁にかかっている時計を見やったり、本棚に並んでいる本を探することができる。このようにスムーズな仕方、私が背景の一部を主題的な知覚対象とできるのは、「視野の背景」が、「自我の能動的な関与以前にキネステーゼの身体と一体となって、視覚的感覚質として予め構成されて」（同所）いるからである。ラントグレーベの言葉を用いれば、視野の背景が「先構成（Vorkonstitution）」（Landgrebe 1974, S.473, 66頁）されているからである。しかも、先構成された背景としての視覚的感覚質、あるいは、時計の音や電気製品の低いモーター音といった聴覚的感覚質は、主題的な知覚対象とはなっていないにもかかわらず、キネステーゼの身体が絶えず発揮している構成作用によってもたらされる、「触発性（Affektion）」（a.a.O., S.476, 70頁）を備えている。それゆえ、この触発性は、目や耳といった「私の身体器官としての感性〔的な知覚〕」器官の触発性である」（a.a.O., S.477, 70頁）。背景の一部がスムーズな仕方、主題的な知覚対象となるのは、上述したように背景が先構成されていると同時に、私の身体や意識が、こうした「視野の背景に〔よって、自我が能動的に関与する以前から絶えず〕触発されている」（中田 1993, 138頁）からである。

例えば、私の部屋が、程良い温度に保たれており、耳障りな音も聞こえず、目を煩わせるようなものもない場合には、充足した身体感情が生じ、心地よさ、穏やかさ、あるいは安堵感として、私

に感じられることになる。しかも、身体感情としての「こうした覚知 (Innesein) は、単なる“感情”ではなく、触発してくる (affizieren) ものや、キネステーゼ的な運動がそれへと向けられているものの真中にある、という状態の兆候である」(Landgrebe1974,S.478,72頁)。そうである以上、覚知とは、雰囲気や感情のいわば源泉となるようなもの、とみなすことができる。また、覚知がこうした機能を備えている以上、ラントグレーベと共に、覚知こそが、「世界についての最初の開示である」(a.a.O.,S.479,73頁)、といえることになる。しかも、中田のいうように、主題的な知覚対象の「背景 [= 感性野] を予め構成しつつその現われと一体となって機能しているキネステーゼ的身体活動によっても自己触発されていること」が、「身体をもって生きているがままの己れが存在における自我の自己被触発存在」(中田1993,139頁)であるならば、この自己触発の作用こそが覚知であることになる。そうである以上、この自己被触発存在によって創り出される普遍的な基盤としての世界もまた、はっきりとした輪郭を備えて展開しているような世界ではないことになる。

・発達障害の当事者が生きている世界

当然のことながら、発達障害の当事者の身体も、私たちと同様、キネステーゼ的身体として機能している。しかし、綾屋のいう「感覚飽和」(綾屋・熊谷2008,57頁)という観点を導入することにより、発達障害の当事者は、ラントグレーベや中田が記述しているのとはいくぶん異なる触発や世界の先構成を体験しているのではないかと、いえることになる。

感覚飽和とは、「大量に刺激が感受されすぎて、たくさんの感覚で頭が埋め尽くされている状態」(同上)のことである。綾屋によれば、「この感覚飽和に陥って情報処理が追いつかないときに、いわゆる『フリーズ』や『パニック』は引き起こされている」という(同上)。通常の人々の知覚の在りようについて、綾屋は次のように記述している。すなわち、「外界からはつねに大量の情報が入ってくる。そこから必要な情報を絞り込んだり、いくつかの情報をカテゴリーとしてまとめあげたりすることで、人は混乱せずに過ごすことができる」(同,59頁)、と。こうした絞り込みやまとめあげを可能にしているのが、常に触発されているキネステーゼ的身体であり、そうして先構成されている世界である。私たちにとって、世界は、適度な触発性を伴って先構成されている。キネステーゼ的身体も、こうした世界の触発性を適度に受け取る能力を備えているからこそ、私たちは知覚をスムーズに行なうことができるのであろう。

他方、感覚飽和という観点からすると、発達障害の当事者は、自己触発が希薄なのではなく、むしろ過多である、といえるのではないだろうか。彼らにとって、先構成されている世界は、適度な触発性と曖昧な輪郭を伴っているのではなく、過度の触発性とはっきりとした輪郭を伴っている、と考えられる。だからこそ、彼らは、知覚において、対象とそれを際立たせる背景とを区別することに困難を覚えたり、大量かつ等価な刺激によって感覚飽和を起こしてしまうのであろう。彼らが、自分の身体感覚や感情状態、知覚対象、他者の気持ちなどが「わからない」と言う際、彼らは、こうした感覚を感知していないのでも、触発されていないのでもない。そうではなくむしろ、感覚を大量に感知しすぎるがゆえに、触発されすぎるがゆえに、飽和してわからなくなってしまうのではないだろうか。すると、彼らのいう「わからない」は、感じられなさや体験できなさを意味してい

るのではなく、逆に、感覚や体験が過多すぎて表現できないことを意味している、といえることになる⁽¹⁰⁾。

3. 身体感覚に基づく他者理解

前節では、現象学的知見に基づき、いわゆる通常の知覚の構造、世界の現われ、感情の身体性と空間性について概観し、発達障害の当事者の特徴を際立たせることを試みた。前節までの考察をふまえ、本節では、他者と同じ一つの世界を生きることや、他者理解について、再び身体という観点から迫っていきたい。

3-1 妥当性の雰囲気

2-2では、自己被触発存在としての妥当性の雰囲気について概観した。そこでの妥当性の雰囲気は、あくまで、＜私＞の行為や存在そのものの連続性を保証し、当たり前という感触をもって＜私＞が生きていくことを支えているものであった。しかし、2-1でシュミッツと共に考察したように、雰囲気はそもそも、空間性を備えており、空間に伸び広がっている。つまり、雰囲気は、私だけが感じるものではなく、ある空間に一緒にいる他者にも感じられているものである。そこで、以下では、私と他者に共有されている際の妥当性の雰囲気の機能について概観したい。

・相互了解の基盤としての妥当性の雰囲気

常に自己触発されながら、身をもって共に生きている時、私たちは、互いに醸し出している妥当性の雰囲気を共有している。というのも、雰囲気は、混ざり合いながらある空間を充たすからである。例えば、会場に読経とすすり泣きの声が響く通夜の会場には、静かな悲しみの雰囲気が満ちていて、参列者を悼む気持ちへと自然と誘う。したがって、「すべての知覚物の無限の地平」(中田1997,420頁)であり、それらに実在的な妥当性を与えている世界において、常に自己触発されながら、身をもって共に生きている我々は、互いに醸し出している妥当性の雰囲気を共有している。

だからこそ、私たちは、この共通の「世界内の出来事について何らかの判断を下したり解釈する際に、あるいはそれどころか何らかの思いを馳せる際に、それらの出来事存在を自明なものとして」(同,421頁)、互いに共に経験できるのである。こうした共通の経験を通して達成される共同性について、バルンハルト・ヴァルデンフェルスは、さらに以下のように述べている。すなわち、私たちの共同性が達成されるのは、「相互了解の究極的な基体」である「共同のここにあるこのもの(Diesda)」が、すなわち「同一のもの(dasselbe)が、この一つの世界のなかで(in der einen Welt)、我々にとって潜在的に開かれているのみならず、我々を触発している場合、しかも我々が、関心をもって同一のものに向かって、同一の意味で応え、それによって、外へと向けられた我々の注視が収斂し、かつ、内面へと向けられた我々の注視が収斂する場合、そしてその結果、我々が、

同一のものに関わっていることを同時に共に認め合う場合である」(Waldenfels1971,S.152)、と⁽¹¹⁾。ヴァルデンフェルスのいうように、共同のここにあるこのものが相互了解の基体となりうるのは、その対象に妥当性や<当たり前さ>を付与している妥当性の雰囲気を、私たちが共有しながら身をもって生きているからである。

・雰囲気の共有しがたさ

上述したように、綾屋は、なぜ友人たちが笑うのかを把握することはできないが、彼女たちが楽しそうにしていることは漠然と感知している(綾屋・熊谷2010)。したがって、綾屋の場合には、身体感覚や感情状態としての雰囲気は漠然と感知できる一方で、その雰囲気は、他者と共有された妥当性を伴ったものではない。というのも、友人たちが笑う理由がおのずとわかることや、自分自身も一緒になって楽しんで笑うことを支えているのが、まさに、妥当性の雰囲気だからである。ヴァルデンフェルスに依拠すれば、妥当性の雰囲気の共有できなさは、ある知覚対象を他者と同一のものと捉えられないことに留まらず、他者と同じ一つの世界という基盤のうえで、他者と同じ一つの経験を身をもって行なっていることに対する実感のあやふやさに繋がる。「みんなはつながれて羨ましいな」「私はつながれなくて寂しいな」と綾屋は述べているが(綾屋・熊谷2010)、他者と繋がるこうした感覚を支えているのが、妥当性の雰囲気である。さらに言えば、非主題的あるいは潜在的な次元での他者との繋がりを感じているからこそ、私たちは、<当たり前>という感触をもって、日常生活を支障なく営めるのであろう。他方、発達障害の当事者は、他者の気持ちがわからなかったり、日常の環境が少しでも異なることでパニック状態に陥ってしまうことを典型例として、こうした<当たり前>の感触を持ちづらい。だからこそ、彼らは、日常生活に多大なる負担を感じたり、環境が少しでも異なると「いつもと違う」状況になってしまうと、決まりきった行動のパターンを遂行できなくなってしまうのであろう(綾屋・熊谷2010)。

3-2 匿名的な間身体性

・匿名的な間身体性という原地盤

では、そもそも、なぜ私たちは通常、雰囲気を身をもって他者と共に生きることができるのであろうか。この問いに答えてくれるのが、現象学者の山口一郎である。

自己と他者の区分の始原について思索するなかで、山口は、「自分と他人の区別がついていない」乳幼児は、「内部感覚と外部感覚の区別が成立していない遍身体性、ないし汎身体性」を生きている(山口2005, 262頁)、とする。この時、乳児によって生きられているのが、「受動的相互主観性の領域」(同,402頁)、換言すれば、「衝動的で匿名的な間身体性の次元」(同,229頁)である。こうした匿名的な間身体性の次元から自己と他者とが生成するきっかけについて、山口は、乳児の発する喃語を典型例として、以下のように考察している。

乳児が自分で喃語を発する時には、その乳児の身体において、声を発する際の身体活動としての「キネステーゼ」と「声(聴覚)」との間で、「一方が起これば必ず他方が起こるという相互覚起

の対化現象の融合」が生じる（同,183頁）。他方、母親が子どもの喃語を模倣する時には、子どもにおいて、「“声”の予感」は満たされるが、その声に対応するはずの「“キネステーゼ”の予感」が、実際に発声した際にもたらされるであろう運動感覚といった「“キネステーゼの感覚素材”によって」充実されない、という事態が生じる（同所）。このように、「たえず受動的で本能的なキネステーゼを伴う“自分”の身体と、本能的キネステーゼを伴わない“他”の身体との」差異が、乳幼児によって「繰り返し経験され」（同,202-203頁）ることにより、それまで生きられていた匿名的な「間身体性が身体の自己中心化へと変転する」（同,396頁）。まさにその時、「自我の自我性の生成と軌を一にして」、「他者の他者性」（同上）が同時に生成することになる。

山口に依拠することにより、自己と他者は、匿名的な「間身体性の原地盤」（同,310頁）から等しくかつ同時的に生成してきた、といえることになる。しかも、山口によれば、自他の等根源性は、「成人においても決して立ち去られることのない原地盤」（同所）であり続け、「生き生きした現在の根底に流れている相互主観性の基底層」として常に働いている（同,396頁）。したがって、自他の区別が成立した後でも、「間身体性の土壌とそこからの起源を含まないような感覚質は存在しない」（同,264頁）、とさえいえることになる。このように山口は、成人の意識や身体においても、あらゆる感覚はまず間身体的な感覚として成立している、とみなしている。そうであるからこそ、「『私の痛み』と『他者の痛み』との断絶…は、決して根源的なものではなく、二次的なものにすぎず、本来の『間身体的な痛み』という感覚質に事後的に生成した自我と他我の違いを付加しているにすぎない」（同,263頁）ことになる。つまり、私たちの意識には、匿名的な間身体性に基づけられた、間身体的な感覚の層があることになる。

・発達障害における匿名的な間身体性

では、発達障害の当事者においては、匿名的な間身体性や、間身体的な感覚の層はどうなっているのだろうか。

自分の痛みも他者の痛みも捉えにくい、という在りようからすると、一見すると彼らにおいては、匿名的な間身体性や間身体的な感覚の層が十分に機能していない、と考えられるであろう。しかし、本稿でここまで考察してきたように、綾屋を典型例として、発達障害の当事者においては、匿名的な間身体性や、間身体的な感覚の層は、場合によっては通常の人よりも繊細かつ豊かに機能している、という可能性も考えられる。繊細かつ豊かに機能しているからこそ、彼らは、そこに生起した感覚を、例えば「痛み」としてまとめあげることや、さらには、「他者の痛み」や「自分の痛み」へと感じ分けることに、困難さを抱えてしまうのではないだろうか。

例えば、綾屋は、自分には「他者の表情や動作、話し方の癖などが侵入しやすい」ことを自覚している（綾屋・熊谷2008,104頁）。さらには、彼女が「キャラ」と呼ぶところの、高次の全体像が侵入してくることにより、「他者の思惑が自我を侵食してくると感じる」ことさえあるという（同,108頁以下）。こうした他者からの侵食が生じるのは、綾屋においては、匿名的な間身体性が充分すぎるほどに機能しているからであろう。ただし、綾屋の場合には、匿名的な間身体性に基づけられた感覚、所作、さらには思考さえをも、自分のものと他者のものとに感じ分けることや、意味づける

ことが難しいのであろう。そのため、彼女においては、他者からの侵入が容易に生じてしまう、と考えられるのである。

4. おわりに

発達障害の当事者にあつては、自分自身の身体感覚や感情の捉えがたさが、他者の身体感覚や感情の捉えがたさと密接に繋がっている、と考えられる。そのため、本稿では、自己と他者という二つの次元における捉えがたさを理解するために、当事者による記述と、身体と感情に関する現象学的知見を手がかりとした。

本稿では、身体性と空間性を伴った感情状態、妥当性の雰囲気としての自己被触発存在、先構成されている世界、匿名的な間身体性、といった観点から、いわゆる通常の人間の在りようと、発達障害の当事者の在りようを比較した。その結果、どの観点においても、発達障害の当事者における＜捉えがたさ＞や＜わからなさ＞は、身体の内外に生起する感覚や刺激の希薄さではなく、むしろ、意味や行動にまとめあげることのできない感覚や刺激の過剰さによるものである、と考えられることになった。そうであるならば、発達障害の当事者が生きている世界は、彼ら自身には、意味や行動にまとめあげたり、言語化することが難しいとしても、非常に豊かで繊細な感覚に溢れている世界である、といえる。そうした世界について、彼らに代わって言語化することが、筆者の今後の課題である。

注

- (1) 「フリーズ」とは、身体運動をなんら実現できなくなり、文字通り、身体運動や思考が固まってしまう在りようのことである。
- (2) 「キャットキット」というこの教材では、「顔がかつかとなるというのが怒りの中で10分の9」、「身体がそわそわするの10分の5」などの規定がなされているという。
- (3) 本稿において、〔 〕は、筆者による補足を表わす。
- (4) 「感覚の希薄さ」は、当事者が蒙っているであろう身体感覚や外的な刺激の希薄さと比例しない。むしろ、1-1で概観したように、当事者は、私たちとは比べられないほどに、多様な感覚を優劣のつかない状態で一度に大量に感知している。だからこそ、それらの感覚を取捨選択してある意味や行動にまとめあげることができず、結果として、「わからない」と表現するしかなくなっているようにみえる。
- (5) この引用は、ケルン大学のフッサール文庫に所蔵されている草稿に基づいている。草稿は出版されていないため、本文中に草稿番号と箇所を示す。
- (6) 行為や存在そのものの連続性が希薄であるということは、時間の感覚も希薄であるといえる。時間性の観点から発達障害について考察することは、今後の課題としたい。
- (7) 本稿でいう＜当たり前＞の感触は、精神病理学者ブランケンブルクのいう「自明性」(ブランケンブルク1978)に

近いものである、といえよう。

- (8) 欧文原著と邦訳がある文献に関しては、原著と邦訳のページ数を併記することで、引用箇所を示す。なお、引用に際しては、邦訳を参考にしながらも、自分なりの訳を当てた箇所もある。
- (9) キネステーズとは、運動感覚と区別するためにフッサールが造った言葉であり、物体知覚における物体の現われと身体活動との一体的調和を意味する。フッサール自身は、キネステーズについて以下のように記述している。「知覚においてそのつど現われている物体の局面 - 呈示と諸キネステーズとは、並列的な〔時間〕経過をたどるのではなく、むしろ両者は、次のような仕方で共働している。すなわち、諸キネステーズの局面、つまりキネステーズ的 - 感性的全体状況としての諸局面は、キネステーズ全体の活発な変化のおのおのにおいて、あれこれ個別のキネステーズを活動させることによって、連続的に〔或る変化を〕要求しており、この要求をそれに見合った仕方ですべてを充実することを介してのみ、物体の諸局面としての存在意味と妥当性とを備えることになる」(Husserl1954,S.108f,147頁)、と。したがって、身体活動と物体の現われとの、こうしたキネステーズ的な一体的調和こそが、或る物体をリアルな実在物として知覚することを可能にしている。と同時に、通常私たちが、「私が動く」、「私がなす (Ich tue)」(aa.O.,S.108,同上) という仕方では、世界やその世界内のあらゆる存在者を主題的に知覚している以上、私たちの身体は、キネステーズ的身体として常に機能していることになる。
- (10) 綾屋は、空腹の感覚を例に挙げ、一般的な人と自分とを比較するなかで、「人びとの『おなかすいた』へのまとめあげは、たしかにスピードは速いが、実はとても大雑把で……うっかりしていることの裏返しではないだろうか」(綾屋・熊谷2008,29頁)、と述べている。空腹がなかなか捉えられないことを、繊細さや正確さと理解しうるのと同様、本文中で述べた自己触発の過多も、発達障害の当事者の体験の豊かさや奥深さを示しているといえる。彼らが言う「わからない」は、文字通りの意味での「わからない」ではないのである。
- (11) “Diesda” の訳語については、邦訳者である山口一郎氏による卓越した訳語を、そのまま用いることにした。

引用文献

- 綾屋紗月・熊谷晋一郎2008『発達障害当事者研究』医学書院
- 綾屋紗月・熊谷晋一郎2010『つながりの作法』NHK出版
- ブランケンブルク1978『自明性の喪失』木村敏他訳、みすず書房
- Husserl,E.1954, *Die Krisis der europäischen Wissenschaften und die transzendente Phänomenologie*, Martinus Nijhoff;『ヨーロッパ諸学の危機と超越論的現象学』細谷恒夫他訳、中央公論社、1974
- 神田橋條治ほか2010『発達障害は治りますか?』花風社
- 小林隆児2010『関係からみた発達障害』金剛出版
- 鯨岡峻2012『共に生きるための関係発達臨床』花園大学心理カウンセリングセンター監修、橋本和明編『発達障害支援の可能性』創元社
- 中田基昭1993『授業の現象学』東京大学出版会
- 中田基昭1997『現象学から授業の世界へ』東京大学出版会
- 杉山登志郎2012a『「発達障害」をどう捉えるか』杉山登志郎著作集3 児童青年精神医学の新世紀』日本評論社
- 杉山登志郎2012b『子ども虐待と発達障害』杉山登志郎著作集3 児童青年精神医学の新世紀』日本評論社

Schmitz,M. 1974 Das leibliche Befinden und die Gefühle, *Zeitschrift für philosophische Forschung*, Nr28, 「身体の状態感と感情」,新田義弘他編『現象学の根本問題』,晃洋書房1978

Schmitz,M. 1981 System der PhilosophieⅢ/2, Bouvier

滝川一廣2012「これからの発達障害を考える」花園大学心理カウンセリングセンター監修,橋本和明編『発達障害支援の可能性』創元社

田中千穂子2009『発達障害の理解と対応』金子書房

Waldenfels,B1971 *Das Zwischenreich des Dialog*, Martinus Nijhoff, 「対話の中間領域」山口一郎抄訳,『現象学の展望』,新田義弘・村田純一編,国文社1986

山口一郎2005『存在から生成へ』知泉書館

補遺

本研究は、2012年度科学研究費（研究スタート支援，課題番号24830075「学習意欲と学力の低い子どもたちに関する事例研究——自己肯定感に着目して」）の助成によって行なわれたものである。